

第6回「いのちの子ども」

—なんともチグハグな人間世界—

川崎 二三彦

本誌執筆者のプロフィール欄が充実しているの、これまで本欄に書いていた前置きは、そちらに転居、統合しました。

「紛争が絶えないパレスチナとイスラエル。余命を宣告されたパレスチナ人の子どもを救うために、一人のイスラエル人医師が立ち上がった」

という前振り（実はこれ、予告編冒頭のナレーション）を聞かされると、なるほど映画のストーリーとしては何かが起きるぞ、という期待感がもてる。ところがこの映画、フィクションではなくて完全なドキュメントなのである。パレスチナとイスラエル両方の人が交錯するので、ときに混乱してしまったけれど、監督のイスラエル人テレビジャーナリスト・エルダールが追いかけるのは、余命わずかと宣告されたパレスチナの子どもと、彼を救おうとするイスラエル人医師及びその周辺のたくさんの人たちである。

＊

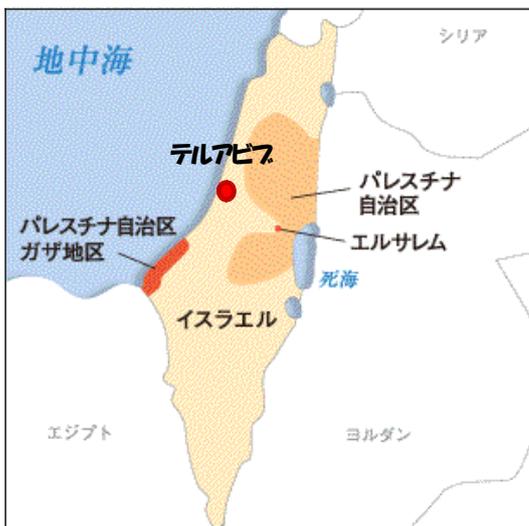
とはいえ、知識少ない私は端から事情が呑み込めない。何しろナレーショ

ンが「イスラエルのユダヤ人とパレスチナのアラブ人をつなぐ唯一の架け橋であるテルアビブ近郊の病院」と言った途端、「へえ、そういうことなの？」と驚くしかないのだから。

そもそもテルアビブとガザ地区の地理上の関係もよくわからず、映画のパンフにもテルアビブは載っていなかったの、後から地図で確認してみた。映画を観ている間は、何となくガザ地区のすぐ隣ぐらいに考えていたのだけれど、思っていたより遠い。ということは、ガザのアラブ人は、治療などのためイスラエル国内にたびたび出かけているということなのか、と考えてみたりする。

余談だが、私がまだ学生だった 1972 年、テルアビブ空港で日本赤軍が無差別に銃を乱射し、居合わせた約百名が死傷するという大事件があった。実はこのとき開かれた学生自治会の大会で、「無差別大量殺人は許せない」と発言した瞬間、私はあっという間に赤ヘル学生に取り囲まれ、ビラを丸めた紙つぶてが飛んでくるわ竹竿で突かれるわで立ち往生するはめに陥った。それもそのはず当時の自治会執行部は、実は日本赤軍と深い関係を持っていたのである。以来、私がパレスチナ問題について語ることはないのだが、今回は本作品に触発され、何十年ぶりかでおずおずと書いている次第。

さて映画は、つまりこのドキュメントは、アラブ人で骨髄移植が必要な生



後4ヵ月の赤ん坊を診たイスラエル人医師が、テレビで影響力を持つ本映画の監督に助力を請うところからスタートする。彼はたぶん、要請に応じつつこれをドキュメントに仕立てようと考えたのであろう。

中には匿名を条件とした者もいたというけれど、この呼びかけに多くのイスラエル人が協力し、手術に必要な5万5千ドルはまたたくまに集まっていた。

「ホテル・ルワンダ」という映画にもなったルワンダ内戦では、ツチ族とみるやそれだけでフツ族過激派が虐殺を繰り返したはずだが、ここパレスチナでは、国家的な対立と抗争が長く続いてはいても、こういう形で惜しみない援助がなされるのか、と私はまたまた知らない事実を教えられて感心する。

ところがどっこい、輸血のために親戚がガザから病院へ向かうちょうどそのとき、紛争が勃発してイスラエルによるガザ地区攻撃が始まってしまう。そのため検問所は閉ざされるのだが、そこはテレビの力なのかどうか、何とか切り抜ける。

映画は、一人の子どもの命を救うために必死になっている人々と、まさに同じ時、同じ地域、同じ人々によって街が破壊されていく様子を並べて映し、皮肉でも何でもなく私たちの前に提示する。付け加えれば、イスラエル側にガザ地区の悲惨な姿を生々しく伝えたのは、やはり本作の監督エルダールだ。彼は、イスラエルで活躍するアラブ人医師が軍医としてガザ地区に入り、自分の娘の死を知って悲嘆に^{なまなま}眩れる肉声を、生放送で流したのである。一方で石を積み、他方でそれを蹴飛ば



し、また積み上げる。人間はまことにチグハグというほかない。

一方、イスラエル人医師によって我が子の手術を受けるアラブ人の両親は、イスラエルの援助を受けることを、同じアラブ人から厳しく非難される。不安を覚えた母親は、監督のインタビューにチグハグな返答をし、いぶかしがられる。

どうも映画を見、こうして書いていても複雑すぎて理解不足は否めない。とにかく言えることは、たった一人の子どもに対する治療をめぐっても、いわば二千年余り続く民族対立の歴史が象徴的に現れるということだ。

とはいえ、石を積むエネルギーの源は、幼い子どもの命であることに間違いはない。この命を前にすると、二千年の対立も何もかもが消し飛ぶのである。治療の成功を素直に喜びつつ、子どもの力の大きさを思い知った映画であった。

鑑賞データ

2011/07/30 ヒューマントラストシネマ有楽町

*公式HP <http://www.inochinokodomo.com/>

* Twitter への投稿 <http://coco.to/movie/14548>